View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

ヨーロッパにおける先進的なデザイン教育方法の調査研究

RESEARCH ON DESIGN EDUCATION PROGRAM

小山　明　　デザイン教育研究センター　教授
岡部　憲明　　デザイン教育研究センター　教授
鈴木　明　　大学院芸術工学研究科　教授
藤山　哲朗　　デザイン学部環境・建築デザイン学科　准教授
山﨑　均　　デザイン教育研究センター　教授

*1)他の共同研究者リストは註に記載。

Akira KOYAMA　Center for Design Studies, Professor
Noriaki OKABE　Center for Design Studies, Professor
Akira SUZUKI　Graduate School of Arts and Design, Professor
Tetsuro FUJIYAMA　Department of Environmental Design, School of Design, Associate Professor
Hitoshi YAMAZAKI　Center for Design Studies, Professor

要旨

本研究はデザイン教育研究センターの研究活動、すなわちデザイナーやアーティストを目指す学生のための新たな教育プログラム開発のための調査研究、これを基盤とした公開特別講義を中心とするカリキュラムへの組み込み、研究成果の報告と社会とのコミュニケーションを進めるためのメディアとしての書籍出版、という一連の活動と連動するものである。

ここでは、出版された『中山英之/スケッチング』（新宿書房刊）について解説が行われる。はじめに 1 本の線があり、それに線が加わり、そのたびごとにそこに現れる空間が変わっていく、このスケッチの方法は中山氏が普段の設計プロセスにおいても行っているスケッチの方法であり、思考の枠組みを広げ、次元を行き来しながら設計を進めていくという独特な方法論を示すものである。

このスケッチの描き方を書籍デザインそのものに反映させる試みをおこなった。まるで、絵本のように見える親しみやすい線書きのスケッチには、限りなく奥の深いデザインの思想が隠されている。

Summary

In early June 2009, Prof. Yuichiro Kodama arranged for Nakayama to address our Department of Environmental Design. At this special guest lecture, he presented an overview of his projects since going independent from Ito's office, giving us insight into the rigorous reasoning that shapes his spaces while yet allowing a remarkable sensitivity toward fragile ephemera: clover growing on a prospective house site, thick weeds in a field designated for a kiosk design competition in Hokkaido. Using line drawings to illustrate how he expands upon a basic framework of spatial concepts, his secret seems to lie in that wondrous window of consciousness he invokes somewhere between two and three dimensions. In November, toward this book, Nakayama gave a private lecture at his office to only a few people involved with the editing, design and publishing.

1）研究の背景

本研究はデザイン教育研究センターの研究活動、すなわちデザイナーやアーティストを目指す学生のための新たな教育プログラム開発のための調査研究、これを基盤とした公開特別講義を中心とするカリキュラムへの組み込み、研究成果の報告と社会とのコミュニケーションを進めるためのメディアとしての書籍出版、という一連の活動と連動するものである。

デザイン教育研究センターでは新たな教育プログラム開発を目的として、これまでヨーロッパにおける先進的なデザインおよびアートの教育方法に関する教育者へのインタビュー調査を実施している。ロンドンのロイヤル・カレッジ・オブ・アート（ＲＣＡ）、イタリアのイブレア･インタラクションデザイン研究所(現在はドムスアカデミー）において教育プログラム開発者に対しインタビューを行い、デザイン領域における最先端の教育方法に関する調査を行っている*2)。

新しいデザイン領域であると同時に、新たなデザイン教育領域として位置づけられるインタラクションデザインは、とくに現代のコンピュータをはじめとするブラックボックス化した技術やシステムと人間との関係を「振る舞い」という視点からとらえなおし、人間の行為を自然に誘導・誘発するデザインの方法論として一般的にはとらえられている。

こうした考え方は、デザイン領域にとどまることなく、あらゆる人間の生活の場面において有効なものである。一方で、とくに現代アートの領域における作品とそれを鑑賞する人間との関係においては、それが人間に様々な感覚や思考を喚起し、あるいは挑発する仕組みの一部として機能していると見ることもできる。

デザイン教育研究センターでは、こうした視点をも含め、美術館におけるさまざまに工夫された展示の方法に注目し、内外美術館における現代アートの展示システムに関する調査を行っている*3)。

本年度は、こうした研究を継続し、またより深く考察をすすめていく目的で、以下の三つのコアに重点をおいて研究を行なった。

A) 「現代におけるリアリティ」をテーマとした研究会の開催

B) アーティストへのインタビューと美術館における現代アート展示方法の調査研究

C) 書籍出版をメディアとしたデザインの実践的研究

2) 研究会開催と公開特別講義の実施

多木浩二客員教授を中心とする研究会が、東京芸術大学、IAMAS、神戸芸術工科大学などにおいて計４回行われた。ここでは、現代におけるリアリティの喪失と、その表現としての現代アートの問題、写真表現の問題、ベケットの戯曲におけるリアリティの問題などについてディスカッションが行われた。ここにおけるディスカッションをもとに「サミュエル・ベケットと建築」（入江経一 IAMAS 教授）、ベルリンにおけるアーティストへのインタビューをもとにした「ディー・テートリッヒェ・ドーリス」（明石政紀氏）、そしてスロミンスキーの作品を分析した大学院における現代アート連続講義「現代美術論」（中山和也京都造形芸術大学准教授）等の公開特別講義がプログラムされた。美術館の展示システムの調査は、ベルリンのハンブルガーバンホフ現代美術館、フランクフルトの現代美術館（ＭＭＫ）にて行われた。国内における展示の見学を行なった金沢２１世紀美術館の「ニットカフェ･イン・マイルーム」は、「現代美術論特別講義」（西山美なコ氏）としてプログラムされている。

3) 書籍『中山英之/スケッチング』の出版

建築家の中山英之氏は、本学が主催する「新しい時代の図書館研究会」が多摩美術大学図書館で開催された際に一度講義をお願いしている。その後、小玉祐一郎教授のコーディネーションにより神戸芸術工科大学において公開特別講義が開催されることとなった。

当日のレクチャーでは、伊東豊雄事務所独立後につくられたプロジェクトについての解説がなされた。計画中の住宅の敷地におけるクローバーに覆われた地面への関心や、北海道の草原に立つキオスクのコンペテ

ィションにおける、やはりびっしりと生えている雑草に対して抱いてしまう、非常に些細で消え入りそうなフラジャイルなものへの志向などに発しながら、しかし実際の設計段階では、きわめて論理的で強靭なコンセプトを提示して、空間が構成されていくさまをうかがい知ることができた。線書きのスケッチは空間に対する思考の枠組みを広げるための手段として使用されており、二次元と三次元の中間にある、特別な認識のスペース上に、彼の不思議な空間が生まれてくる秘密があるように思われた。

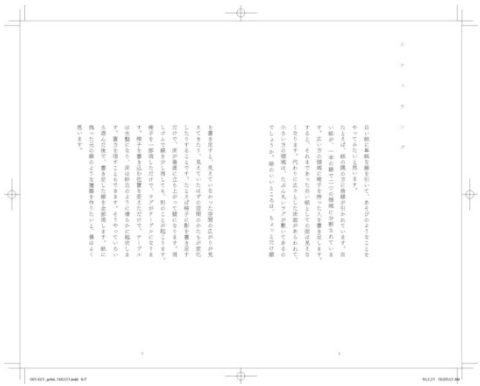

図１）『中山英之/スケッチング』*4)、pp.6-7

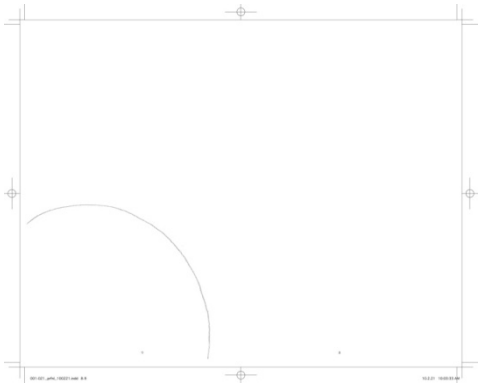

図２）『中山英之/スケッチング』*4)、pp.8-9

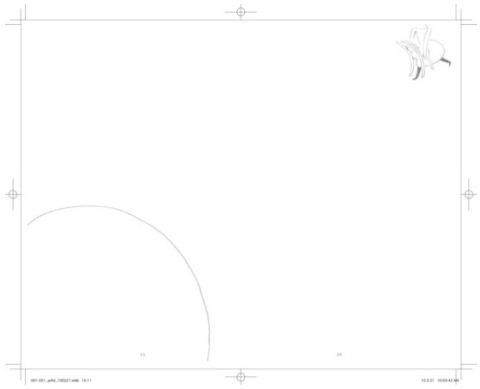

図３）『中山英之/スケッチング』*4)、pp.10-11

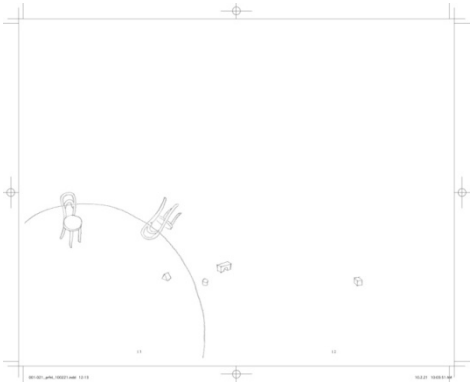

図４）『中山英之/スケッチング』*4)、pp.12-13

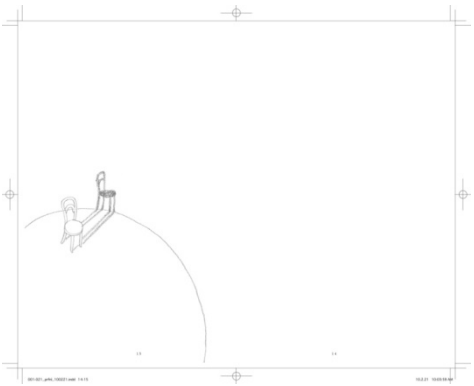

図５）『中山英之/スケッチング』*4)、pp.14-15

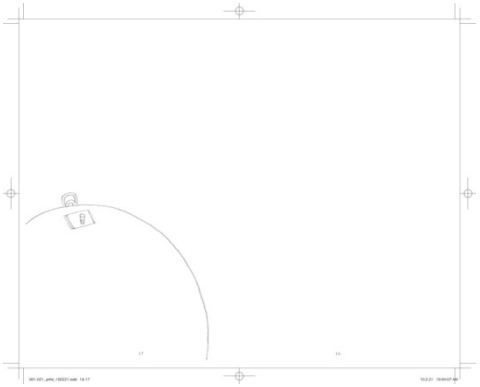

図６）『中山英之/スケッチング』*4)、pp.16-17

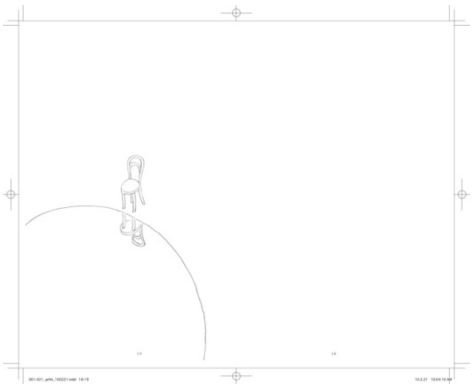

図７）『中山英之/スケッチング』*4)、pp.18-19

図８）『中山英之/スケッチング』*4)、pp.20-21

4）書籍の構成

書籍の内容は、完全に書籍収録のみを目的として再度行われたプライベートレクチャーの書き起こしがもとになっている。このため、大学におけるレクチャーとは内容が異なり､書き起こしは助手の尹が行なった。

書籍化に関しては、ブックデザイナーの赤崎教授、出版社新宿書房村山編集長と打ち合わせを行い、単なる書き起こし原稿と図版をならべた講義録としてではなく、書籍として中山氏のデザイン思想が読者に伝えられるような構成方法が検討された。

そのために最優先されたことは、中山氏の設計プロセスの中核にあるスケッチの描き方を書籍構成の中心に置く、ということであった。はじめに１本の線があり、それに線が加わり、そのたびごとにそこに現れる空間が変わっていく、このスケッチの方法は中山氏が普段の設計プロセスにおいても行っているスケッチの方法であり、思考の枠組みを広げ、次元を行き来しながら設計を進めていくという独特な方法論を示すものである。まるで、絵本のように見える親しみやすい線書きのスケッチには、限りなく奥の深いデザインの思想が隠されている。

また、これらのスケッチの白い余白の特徴を書籍全体の表現とすべく、１ページの文字量を減らし、また図版の大きさを調整し、書籍自体が中山氏の感じ方、考え方を表すようなものとなることを目指した。

序文、本文、作品リスト、鈴木明教授による解説、そしてあとがきを含めたすべての和文の英訳を行い、これらの横書き英文テキストは、巻末から逆に左綴じの洋書と同じ方法でページ展開する構成とした。右から読み進めていく１３１ページの和文と左からの２７ページの英文が、一か所で出会うことになる。

また、白いカバーの下にあるカラー印刷の表紙には、中山氏の描いたクローバー畑のドローイングが使用されている。ここにはいくつかの四つ葉のクローバーが隠されている。（文責：小山明）

註

1）共同執筆者
大内克哉、デザイン教育研究センター准教授
久冨敏明、デザイン教育研究センター准教授
尹智博、デザイン教育研究センター助手

2）小山明他、「現代の芸術系大学における教育に関する研究」、『神戸芸術工科大学紀要/芸術工学 2006』、
http://kiyou.kobe-du.ac.jp/06/report/20-01.html
（2010 年 8 月 23 日に最終確認）
小山明他､「デザイン教育および現代アート教育に関する基礎的調査研究：インタラクションデザインをデザインする:プロダクトによって広げられる思考､感情、記憶、あるいは政治性、社会性」、『神戸芸術工科大学紀要/芸術工学 2008』、
http://kiyou.kobe-du.ac.jp/08/report/19-01.html
（2010 年 8 月 23 日に最終確認）
3）小山明他、「ミュージアム（美術館・博物館）における展示システムに関する研究-美術館の拡張-その１」、『神戸芸術工科大学紀要/芸術工学 2005』、
http://kiyou.kobe-du.ac.jp/05/thesis/04-01.html
（2010 年 8 月 23 日に最終確認）
小山明他、「ミュージアム（美術館・博物館）における展示システムに関する研究-美術館の拡張-その 2」､『神戸芸術工科大学紀要/芸術工学 2005』、
http://kiyou.kobe-du.ac.jp/05/thesis/05-01.html
（2010 年 8 月 23 日に最終確認）
4)神戸芸術工科大学デザイン教育研究センター編､『中山英之/スケッチング』、新宿書房、2010 年 3 月